

# ガンダーラ彫刻と阿弥陀仏

岩松 浅夫

## 一 はじめに

阿弥陀仏への信仰が、言わば大乘仏教運動の一環として、インドそのもので起ったものであることは今日疑問の余地はないと言つてよいであろうが、しかしその信仰の実態が果してどうであつたかという段になると、その点については必ずしも全く疑問の余地なしとはしないようである。と言うのも、インドにおけるそのような信仰の実態を物語る文献資料についてはもちろん、それが実際に存在したことを証明するような例えば考古学的な遺物などについても、外ならぬ当のインドそのものの地からは、これ迄殆ど全くと言つてよい程伝えられ若しくは発見・発掘されていないとされてきたからである。実際、例えば法顯や玄奘など当時の所謂入竺僧の記録<sup>1</sup>旅行記にはこの仏やその信仰に対する記述は全く見られないわけであるし、他方また例えば碑銘などによって明らかに阿弥陀仏を表していると思われるような仏像の如き遺品も、やはり当のインドからは長い間発見されていないとされてきたからである。このような状況下で、したがつて、学界に大きなインパクトを与えることになったのは、やはり何と言つてもマトゥ

ラー出土の一仏像の台座ではないであろうか。すなわち、この台座は一九七六年にマトゥラー市近郊のゴーヴィンドナガル (Govindnagar) で出土したと言われ、また早くもその翌年にはわが国にも紹介されるに至ったというものであるが、そこには二世紀頃のものと思われる古い時代のブラーフミー文字による碑銘が刻まれており、その中には明らかに「アミターバ」 (Amitabha) と読み得る語 (仏名) が記されてもいたからである。つまり、これによって、それ迄長い間ないと思われてきた阿弥陀仏の像が外ならぬ当のインドにおいて初めて発見されその存在が確認されたということになったわけで、更に言えば、インドにおいても阿弥陀仏の信仰は決してなかったわけではなくて実際に存在していたことが証明されたことにもなるわけである。ということで、この台座の出現は、学界にも極めて大きな衝撃を与えることになったという次第である。

こうして、この台座は、少なくともマトゥラー若しくはその近郊では阿弥陀仏の像が実際に作られたがってまた実際にそれが信仰されていたことを証するものとして、つまりインドにおける阿弥陀仏信仰の実態について何らか物語るものであるという点からも、極めて重要な意味をもつものということになるわけであるが、しかしその一方では、そのようなマトゥラー仏についてはともかくとしても、少なくともそれと同程度か或いはむしろそれ以上に古いとも見られているもう一方のガンダーラ仏の場合については、このような阿弥陀仏の像の存在については、少なくともそれが広く一般に認められているという意味では、まだ確認されるには至っていないと言ってよいようである。しかし、果して実際にそうであったのであろうか、つまり、ガンダーラ仏の場合には、阿弥陀仏の像は本当に存在しなかった、或いは、そのようにしか見得ない問題なのであろうか。この点について筆者は、実は必ずしもそうではなかったのではないかと考えているのである。と言うのも、近時筆者がその写真を目にするようになった、上記マトゥラー仏の

台座の出現―発見を挟む前後一〇年程という比較的最近になって世に知られるようになった二体のガンダーラ仏の像<sup>④</sup>を基にしたときに、特にそのようなことが言い得るのではないかと思われたからなのである。そこでこの小論では、そのような二体の像の検討を通して、このガンダーラ彫刻における阿弥陀仏の像の存在如何という問題について、少しく検討を加えてみることにしたい。尤も、このようには言っても、実はこの二体の像というのはその道の専門家などにとっては既に周知のものであって、更に言えば、特にその中の一体についてはこれを阿弥陀仏と認める意見が一般的になりつつあるように思われるわけでもあるが、ともあれ、もう一方の像との関係からすればまだ検討や考察の余地は多分にあるように思われるので、ここではそのようなことを試みてみたいというわけである。<sup>⑤</sup>

## 二 従来 の 諸 説

ところで、今、上記の近出の二体の場合を別にすれば、ガンダーラ彫刻においてはこれ迄阿弥陀仏の像の存在は確認されていない旨のことを述べたわけであるが、そのことは、これ迄ガンダーラ彫刻には阿弥陀仏の像は全くないと考えられてきたということを意味し、若しくは言おうとするものでは決してない。そうではなくて、実はガンダーラ彫刻の場合にも、阿弥陀仏を表しているのではないかと考えられたような像は、実際にはいくつか存在していたのである。すなわち、その中の特にある一部のものについては、それを阿弥陀仏を表したものと見ようとする意見などが提起されたこともあったが、それらはいずれも一般に受容られられ広く認められる迄には至っていない――若しくは、いないらしい――という意味での謂だということである。



図1 『ガンダーラ美術Ⅰ』より



図2 *L'Art Gréco-Bouddhique du Gandhâra* より



図3 『ガンダーラ美術Ⅰ』より



図4 *Investigating Indian Art* より

實際、例えばそのような例として、われわれは有名なモハメッド・ナリー (Mohammed-Nari) 出土の石板像 (図1 参照) を挙げる事ができるであろう。すなわち、この像は、ガンダーラ彫刻の研究で有名なフーシエ (A. Foucher) 以来一般に「舍衛城の神変」を表したものと見られてきたわけであるが、学者の中には必ずしもそうではなくて、阿弥陀仏の一種の変相の如きものを表したものと解するような説も、これ迄全く提起されてこなかったわけではないからである。或いはまた、ローリヤン・タンガイ (Loriyan-Tangai) 出土の三尊仏の像 (図2 参照) などについても、これも同じくフーシエ以来一般に舍衛城の神変を表したものと見られてき、また現に今も一部ではまだそのように考えられているわけであるが、この場合にもやはりそうではなくて、阿弥陀仏——すなわち、阿弥陀三尊!——を表したものと見るような意見も、必ずしも唱えられなかったわけではないからである。<sup>(8)</sup>

このように、ガンダーラ仏の場合にも、これ迄阿弥陀仏の彫像は存在しないと全ての学者や人々によって認められてきたわけでは必ずしもないわけであるが、いずれにせよこのような意見や説に対しては反対や疑問視する声なども皆無というわけではなくて、したがってまだ広く一般に認められる迄には至っていないようだという事である。<sup>(9)</sup><sup>(10)</sup>

### 三 新出の二体のガンダーラ仏について

さて、それではこのガンダーラ仏の場合には、阿弥陀仏の像は本当になかったと見るべきなのであるか、或いはまた、そのように見るしか仕方のないことなのであるか。この問題に関して少しく検討してみるために、ここで筆者は、先にも少しく述べたように、比較的最近になって世に知られるようになった二体のガンダーラ仏の作品につい

で紹介し、またそれが抱える問題点などについても——もしそのようなものとすれば——少しく触れてみたいと思う。尤も、「紹介する」とは言っても、これも先述のように、実はその二体ともいずれもその道の専門家にとっては既知（周知？）のものということになるわけであるが。ともあれ、その二体の像というのは、一方は一九七三年に、またもう一方は一九八二年になってともに初めて世に紹介され、また現在は前者はベルギーのブリュッセルの、また後者はアメリカのロサンゼルス、いずれも個人の所有物になっているというものである。

このうち、まず前者即ち一九七三年のブリュッセルの像<sup>⑪</sup>について言えば、この像は、その正確な発掘場所は不明であるが或いはベシャーワル近郊からの出土品かとも言われ、一時ヨーロッパの美術市場に出回っていたのが後にベルギー・ブリュッセル在住の個人の所有に帰したとされるもので、それが一九七三年になって初めて世に紹介されるようになったというものである（図3参照）。一方、後者即ち一九八二年のロサンゼルスの方<sup>⑫</sup>については、実質的にこれを最初に世に紹介したのはイギリスのブラフ（J. Brough）教授<sup>⑬</sup>だと言っているが、そのブラフ教授によると、この像は、初め一九六一年にタキシラのある個人（古美術商？）の所有品になっていたのが偶まキーフアー（C. Kieffer）教授の目に止まり、その時同教授によって写真が一枚撮影されたが、本体の方はその後行方不明になってしまった不鮮明な写真が一枚残されているだけだとして、ブラフ教授の手によって、その写真と一緒に若干の研究なども伴いつつ公表されたというものである（図4参照）。尤も、実際にはこの像は、その後アメリカ・ロサンゼルス在住の個人の所有に帰していたとのことで、その——ブラフ教授の発表したのとは別の——写真も、実はブラフ教授の発表に先立って一九六八年には既に公表されていたわけであった<sup>⑭</sup>が。

#### 四 二体の像の意味するもの

##### 1 主尊の尊格

もちろん、今ここでこれら二体の像の細々とした特徴その他について詳しく触れている余裕はないし、またその必要もないであろうが（もしあったとしても、筆者如きの手に負えることでは到底ないわけであるが）、ただ、これら二像の性格等について検討してみるために多少コメントめいたものを付加しておくならば、まずこの後者即ち一九八二年のロサンゼルス（16）の像に関して言えば、この像には、写真からも明らかに見てとれるように、その基壇部分に碑銘が刻まれているわけであるが、実はその中には、これの解説・紹介者であるブラフ教授によると、この像の尊格の名前を表す「アムリダハ」(amridaha) 及び「オーローイシュパレー」(oloišpare) と読み得るという語が含まれているということであろう。

そこで、もしそうとすると、つまりブラフ教授のこのような読みに誤りがないとすると、特にこの後者の像の場合には、ここで少しく問題になるのは、このような語＝尊名を有するこの像は一体何を表しているのかということであろう。そして実際、実はこの点についてなのであるが、これの一方の「アムリダハ」なる名前（仏名）については、通常はこのような名前は仏名たると否とを問わず殆ど見かけることのないものだということから言っても、多少疑問若しくは再考の余地もないというわけではないが、しかし、もう一方の「オーローイシュパレー」が

「観音」のサンスクリット名アヴァローキテーシュヴァラ (Avalokiteśvara) に対応するものであることに恐らく疑問の余地がないとすれば、その「観音」と対し組をなす主尊の「アムリダハ」の方についても、やはり阿弥陀仏と見てよい、と言うよりもむしろ、そのように見るべきではないであらうか。<sup>17)</sup> そこでもしそうとすれば、つまりこの「アムリダハ」なる仏名を阿弥陀仏の謂と見ることが許されるならば、ここにわれわれは、ガンダーラ彫刻の中においても、阿弥陀仏の像を——初めて?——確認することができたということになるであらう。

一方、前者の一九七三年のブリュッセルの像の方について言えば、これは、写真(図3参照)からも明らかに見て取れるように、左の脇侍菩薩の頭に冠したターバン冠飾<sup>18)</sup>の中には、禪定印を結んだ仏の像が刻まれている。ところで、後世の図像学などに拠れば、このように宝冠若しくはターバン冠飾に化仏を戴いた菩薩は、通常は「観音」を表すという事になっている。<sup>19)</sup> そのことは、今日殆ど疑問の余地はあるまいと思われるわけであるが、この場合即ちこの菩薩像についてももしそのように見得るとすれば、このような菩薩を脇侍として従えた中央の主尊については、やはり阿弥陀仏を表すと考えてよいのではないかということである。とすれば、この場合にもわれわれは、ガンダーラ仏の中に阿弥陀仏の像を確認し得たということになるであらう。

尤も、このように言うとき、それはやや短絡的な見方ではないかとの批判や反対意見もあるかもしれないが、したがって、その点についても触れておく必要があるかもしれない。と言うのも、実際にそのような、つまり脇侍菩薩の一方を「観音」と認めつつも他方のそれを「勢至」とは——したがって、中央の主尊についても阿弥陀仏と——認めないような見方や意見も、必ずしもないわけではないからである。そこで次にそのような意見について採上げ、反対にそれが抱える問題点などについて少しく検討してみることにしたい。その恐らく最も代表的なものとして、ここでは特に

最近の宮地氏の説について、見てみることにしよう。<sup>20)</sup>

## 2 「観音」と「弥勒」？——宮地氏説の問題点——

さて、その宮地氏の説<sup>21)</sup>についてであるが、その言わんとされるところはこうである。すなわち、ここでは紙数の都合でその要点についてだけ述べることにすれば、氏は、まずガンダーラ彫刻の菩薩像を頭の形によって無冠のものとターバン冠飾を戴くものとに二大別し、そのうちの特に後者は更に手に蓮華若しくは華鬘を持ったものとそうでないものとの二種類に分けられるとして、一方の持蓮華若しくは持華鬘型の菩薩を「観音」、また何も持たない形のそれを「釈迦（悉達太子）」に、それぞれ比定される。一方、前者の無冠の像については、これも詳しく見れば束髪型と（肉髻状の）髻型との二種類に分けられるが、しかし両者とも左手には水瓶を持つことや、また右手が示す印相の上からも区別はつけにくいとして、この場合にはそれらを一括して「弥勒」に比定されるわけである（宮地氏は、「弥勒」の像の比定に当ってはいろいろ図像学的な根拠を挙げておられるが、その点についてはここでは省略する）。そして、そのような分類に基く判定法によるならば、写真（図3参照）からも知られるようにこの一九七三年のブリュッセルの像の右脇侍像は正しくそのような「弥勒」としての特徴を具えているとのことから、これを「弥勒」と判定されるというわけである。一方またこの像の中央の主尊については、その両脇には二菩薩とともに梵天・帝釈の二神も侍しているわけであるが、このようなことなども考慮に入れつつ宮地氏は、これを筆者のように阿弥陀仏ではなくて、「釈迦」を表したものと見られる、というわけである。

宮地氏の主張及びその論拠というのは、大略こういうことである。つまり、換言してこれを言えば、氏はこの一九

七三年のブリュッセルの像を、「釈迦」を主尊にその左右に「観音」と「弥勒」を配した、一種の釈迦三尊——若しくは、五尊——と見られているというわけである。ところで、この像に対するこのような氏の見方乃至は捉え方は、明らかに筆者のそれとは牴牾し相容れないことになるわけであるが、この点に関しては果してどのように捉え、また対処したらよいのであろうか。ここで少しく考えてみるに、確かに上述のような氏の立論や主張は、一見如何にも厳密でまた確固とした図像学的な分析・解釈に基いたものであるから、その意味では非常に学問的でもありしたがってまた説得力のあるものと言いうことができるであらう。しかしその反面、このような氏の見方や特にその最後の言わば結論部分、つまりこの像の右脇侍を「弥勒」と見、また像全体をその「弥勒」と「観音」を両脇侍とする釈迦三尊（五尊）像とされている点については、果してどのようなものであろうか。筆者としては、正しくこの部分に非常に大きな問題があるように思われてならないのである。そこで、以下に少しくその筆者が疑問に思うこと等について述べ、また、それを通して、筆者の考え方の可否などについても、少しく検討してみることしよう。

ところで、ここで筆者が疑問に思い、問題にしたいと思う点というのは他でもない、実は非常に単純かつ素朴なことなのであるが、もしこのブリュッセルの像の右脇侍像を「弥勒」とすると、宮地氏がするように判定された他の三尊若しくは五尊像の場合も含めてであるが、果して両脇侍としてこのような「観音」と「弥勒」をセットにするような組合せが、またこれに「釈迦」を加えて三尊とするような組合せの形式が、作例としてはこのガンダーラ彫刻の場合以外にも見られ、またそのような組合せを説き若しくは保証するような経軌が果して実際に存在するのかということである。と言うのも、もしこの像の右脇侍が実際に「弥勒」でまた中央の主尊が「釈迦」であったとすれば、そのような組合せの像は単にガンダーラ若しくはそれを含む西北インド地方だけではなくてそれ以外の、例えばインド本

土はもちろん中央アジアから更には中国若しくは日本に迄伝わっていてもよい筈であるし、他方また経軌の件についても、もしそのような組合せの考えや乃至はそれ（「釈迦」に「観音」「弥勒」などを組合せたもの）に對する信仰が、地域性や勢力の大小などといったことは別にしても實際にあったものとすれば、経軌と作例の先後関係——つまり、経軌に基いて像が作られたのか、若しくはその反対に像が先にあつて経軌がそれを説明するなどのために後から作られたのか、という——についてはともかくとしても、そのような見方や捉え方は何らかの形で経軌の中などに反映し残されていてもよいように思われるからである。ところで、それではその實際は果してどうかと言うに、寡聞にして筆者はそのどちらも實際にあり、若しくはあつたとは絶えて耳にしたことがない、ということである。尤も、この中の特に前者の問題については、宮地氏はグプタ朝期のサルナートに同様の組合せを表したと見られる像がいくつか存するとされているわけであるが、<sup>23</sup>しかし、それも例えば碑銘などによって確認されているということでは必ずしもないので、やはり飽く迄同氏の推測に留まるに過ぎないことになる。したがって、もちろんそのような組合せが全くなかったと断定し断言すること迄はできまいが、しかし實際問題としては、その可能性はかなり、と言うよりはむしろ、極めて？低かったと見てよいのではないかと筆者は考えるのである。<sup>24</sup>

こうして、このブリュッセルの像の右脇侍像を「弥勒」に、また中央の主尊を「釈迦」に比定しようとされる宮地氏の説は、図像学的には一見それなりに説得力があるように見えるものの、實際には、いくつかの点でかなり大きな難点の存することが明らかになったであろう。そして、このような観点からも筆者は、「観音」に對應するもう一方の脇侍像は「弥勒」ではなくて「勢至」(Mañāśrīmaprāpta)であるべきであつて、したがってまたこれの主尊について、「釈迦」ではなくて阿弥陀仏を表したものと見た方がより自然であろうと考える、というわけである。実

際、「観音」に対しては「勢至」を対置しまたこれらを一組として阿弥陀仏の陪臣の如くする考えは、遅くとも二世紀半ば——乃至は、末頃——迄には既にガンダーラを中心とする西北インド地方では成立し、またある程度は広く流布し知られてもいた筈であるから、少なくとも教義的若しくは経軌の上からは何ら問題はないわけであるし、また後世における実際の作例という問題についても、例えば中国や特に日本ではそのような例<sup>(26)</sup>作品は多々見られるわけであるから、これまた何ら問題はないと言ってよいように思われるのである。

### 3 「勢至」の図像学

尤も、筆者がこのように言う、今度は逆に別の意味で問題が生じてくることになるかもしれない、またそのことを理由に異を唱えようとされる方の中には実際にあるかもしれないので、その点についても触れておく必要があるかもしれない。その問題乃至問題点というのはこうである。すなわち、前述のように、宮地氏の研究によると、このブリュッセルの像の右脇侍像は種々の証跡によって知られる「弥勒」のそれと図像学的には何ら——若しくは、殆ど——区別できないということであったが、そしてまた、宮地氏自身もそのためにこれを「弥勒」と判定されたわけであったが、ではもしそうとすると、少なくともこのようなガンダーラ彫刻の場合には、「弥勒」と「勢至」の両像は同じように表現されて何ら区別されなかったのか、ということである。そして、その一方ではまた、後世の図像学的な見地からすると、仏教の尊格はいずれも何らかの形で区別されて同一に表現されることはないというのが原則の筈であるから、もしそうとすれば、前記のような筆者の見方や捉え方はそのような原則——図像学的な規定——乃至は常識？に反することになるのではないかと。

このような疑問乃至論難に対しては、一体どのように考えまた対処したらよいのであろうか。筆者としても、もし敢えて自説に拘泥しようとすれば、このような点―問題について答える義務乃至むしろ責務があるということになるのかもしれない。ともあれ、これに対しては筆者は、或いはこれら諸像を図像学的にもっと仔細に検討すれば何らかの「弥勒」と「勢至」の両像を区別し得るような指標（特徴）を見出すことも可能なのかもしれないが、いずれにせよそのような図像学的な検討は筆者の能くなし得るところではないので暫く措くとして、ここでは、宮地氏の分析・研究結果をそのままにしてもこのブリュッセルの像の右脇侍像については氏の言われるように「弥勒」ではなくて「勢至」と見た方がよいし、またそのように見ることも必ずしも不可能ではないと考える、ということを書いておきたい。これは、先の言葉に従って言えば、図像学的な原則乃至は常識に反し、むしろある意味ではそれを否定するようなことにもなるわけであるが、しかし、例えそうであったとしても、少なくともこの場合にはそのように、つまりそれら両像は殆ど同じように作られ若しくは作られていたと、解釈し得るような余地は多分にあるように思われるからである。

その点について少しく説明するとすれば、それはこういうことである。つまり、もし上述のような筆者の見方に従うとすれば、この「勢至」と「弥勒」は図像学的に何故同じように表されているのかということが問題になるわけであるが、この点に関しては、筆者は実は二つの面からこれを捉え、またある程度それに答えることも可能なのではないかと考える、ということである。その二つというのは、一つはこれら両菩薩の關係、もっとあり体に言えば両菩薩就中勢至菩薩の起源についての面からということで、またもう一つは、もしこの「勢至」を圖や特に彫刻に表すとしたら、それは果してどのような形態で表現され若しくはそうされるべきであったかということから、ということであ

る。このうち、前者即ち両菩薩とりわけ勢至菩薩の起源問題ということに關しては、筆者は、これら兩者の間には実  
はかなり密接な關係があつて、ある意味では勢至菩薩というのは弥勒菩薩をモデルに創り出されたものではないかと  
も予測しているのであるが、ただその点について詳述していることはここでは種々の理由や都合で不可能でもありま  
た必ずしもその必要もないであらうからこれ以上触れないこととして、後者即ち「勢至」の形像如何との問題につ  
て言えば、一体、筆者の見るところ、この「勢至」が「弥勒」と殆ど同じ形姿で表されるようになったのは別にそれ  
程異とする程のことではなくて、反対にむしろある意味では当然ですらあったのではないかと思われる、ということ  
である。

ただし、筆者がこのように言ふと、中には筆者のこの言葉に意外に思われ、また強弁をしようとしているのではな  
いかと思われる方もあるかもしれないので若干付言しておく、それが決してそのようなものではないことは、次の  
ようなことを考えてみれば比較的容易に納得し得るのではないであらうか。つまり、それは、ここで屢々取上げて関  
説している宮地氏によると、インド古代の尊像は「頭髮を結び、装身具などをつけない」「聖者のイメージ」と、宝冠  
や冠飾をつけ、装身具で飾る「王者的イメージ」との二系列に分れ、それがガンダーラ彫刻の菩薩像にも受継がれ  
て、一方（前者）は前述のような「弥勒」に、また他方（後者）は「観音」と「釈迦」とに、それぞれ展開・發展し  
ていったことであるが、もしこのような氏の意見が正しく、それに従うことにすれば、もし一方の「観音」が  
後者のイメージで描かれ表されたとなると、もう一方の「勢至」の方は果してどのように表象されたかということだ  
ある。そうして、このような設問に対して筆者は、一對という形にしたときの兩者のバランスということから言つて  
も、この「勢至」は当然前者のイメージに拠つた——或いはむしろ、拠らざるを得なかった？——と見るのが自然

であろうと考え<sup>(28)</sup>、またそう見ることによって、このような事態もそれ程の困難なく了解・納得できるのではないかと考えるというわけである<sup>(29)</sup>。ただこの場合に、或いは更に何故この「勢至」の場合にも「弥勒」同様左手に水瓶を持っている——持たされている？——のかが多少問題になるのかもしれないが、しかしこの点に関しては、一方で例えば一見「弥勒」を特徴づけているように見得る水瓶も、実はその表す意味や何故この菩薩がそれを持つのか等のことについては必ずしも分明でないのみならず、他方ではまたこの水瓶は必ずしも「弥勒」だけに限定されるものとは思われず、実際に他の神像などでもこれを持つような例が少なからず見られること<sup>(30)</sup>、そして何よりも勢至菩薩自身が正しくその水瓶と密接に結び付けられている等々のことから言って、それ程異とする程のことではないと見てよいのではないであろうか<sup>(31)</sup>。

#### 4 小 結

説明乃至考証がやや長くなってしまったが、以上のようなことを理由や根拠に、筆者は、宮地氏の所説とは異なつて、この一九七三年のブリュッセルの像の場合についても、これの主尊は阿弥陀仏を表したものと——したがって、像そのものは阿弥陀三尊（五尊）を表すと——認めてよいのではないかと考えるのであるが、如何なものであろうか<sup>(32)</sup>。いずれにせよ、もしこのように見ることが許されたとすれば、ここにわれわれは、先の一九八二年のロサンゼルス<sup>(33)</sup>の像と併せて、マトゥラー仏の場合同様ガンダーラ仏の場合においても、少なくとも二体は阿弥陀仏の像の存在を確認できたということになるであろう。

## 五 その他のガンダーラ仏について

上記新出の二体のガンダーラ仏の尊格やそれが抱える問題点などについては以上で暫く措くとして、ここで、これらの像（写真）を比べて見れば直ちに気付かれるように、この二つの像の間には図像学的に非常によく似た特徴乃至共通点が多々見られるわけであるが、もしこうしてこれら両像の主尊をともに阿弥陀仏と認めることができたとする、ことは単にこの二体だけには留まらない、もっと大きな、重要な意味をもつてくるようにも思われよう。つまり、それはどういうことかと言えば、具体的には、ガンダーラ仏の場合には実はこれら以外にもまだ他に阿弥陀仏の像があった、若しくはそのように認められてもよいのではないかということである。と言うのも、一つには、この両像に共通して見られるような特徴は単にこの二体だけには留まらず他のいくつかの——一群の——作品の中にも同じように共通して見られるということ＝事実があるわけであるが、とともに、他方ではまた、例えば二体だけにせよガンダーラ仏の中に実際に阿弥陀仏の像の存在が確認されたということになれば、それら以外にも存在していたことは多分に考えられることであるし、したがってまたその可能性について検討してみること、強ち無意味なことでもあるまいと思われるからである。そして実際、そのような見方に立って筆者は、その極めて顕著なと言うべき特徴を上記両像といくつか共有するような作例については、やはり同じように阿弥陀仏を表したものと認めてもよいのではないかと考えるのである。では、具体的にはどのような像乃至は作例がそのようなものと見得べきなのであろうか。そこで次にその点に関して、筆者の見方や意見などを少しく述べてみることにしたい。

さて、ここでは便宜的に——煩を避けるために——一九七三年のブリュッセルの像を(A)、また一九八二年のロサンゼルス（B）の像を(B)とそれぞれ表すことにして、ここでこれら両者に共通すると思われるような特徴点について見てみると、まず、両者ともに主尊を挟んで両脇に二菩薩を配した三尊——ただし、(A)はこれに更に二神が加わるので、五尊——形式になっていることが挙げられようか（(B)は右脇侍を欠いているが、本来はあったものと考えられる）。次にこれらの主尊について見ると、そのいずれもが蓮華座の上に結跏趺坐し、偏袒右肩で両手は転法輪印を結んでいることが知られるが、またその頭上には極めて特徴的な花の如きもの（35）の存することも見て取れるであろう。一方また脇侍像（左脇侍）の方についても、これは前述したこととも一部重複することにもなるが、両方の像の取る姿形においてこそ相違は見られる（(A)は立像で左手を腰に当てている——右手の持物乃至は印相の形については不明——が、(B)の方は半跏思惟像で右手の第二指を軽く額に当て、また左手には蓮華を持っている）ものの、いずれも図像学的に見て「観音」と認め得るような形姿をしている——前者はターバン冠飾に化仏を戴き、また後者は左手に蓮華を持っていることに注意——ことなども挙げられるかもしれない。

細かい点迄採上げて言えば、特にその道の専門家などにとっては、両者に共通するような特徴を見出して数え挙げることにはまだいろいろに可能であろうが、差当って筆者の気付いた点で言えば、大略こういったことになるであろうか。さてそこで、ここで筆者は、以上に指摘したような諸特徴の——全部ならずとも——いくつかを上記両者と共通して有するような作例については、その主尊はやはり同じように阿弥陀仏を表したものであるのではないかと考え、またそのように見ることを提起したいと考えるのである。すなわち、その点についてもう少し具体的に言えば、例えばガンダーラ彫刻の中のある像の主尊——若しくは、そのように見得べきような像——が、(1)偏袒右肩で、(2)転法輪印を結

ぶ姿をして、(3)蓮華座の上に結跏趺坐し、(4)更にその両側にはその主尊に就き従うような形で二菩薩——その中の一体が「観音」としての特徴乃至は要素を具えていればなおさら都合がよいわけであるが——が控えるか若しくは脇侍ではなくても菩薩の群像に取り巻かれているといったような場合には、(5)或いは更にそれに加えて主尊の上にはあの極めて特徴的な形をした花?の姿が見られるときにはなおさら、その主尊は阿弥陀仏でしがつてまたその像自体は阿弥陀三尊(五尊)若しくは阿弥陀仏の浄土変相の如きものを表したものと、認めてもよいのではないかというこゝである。<sup>(36)</sup>

尤も、このように両者に共通するような要素をいろいろ挙げてみても、全ての像がこのような要件を皆具えているというわけではないから、これにはもちろん若干ヴァリエーションの存することも考えられるわけであつて、例えば、上に指摘したような条件をいくつか満たすような群像形式の作品の中には、主尊が必ずしも偏袒右肩ではなくて通肩の姿をしたものや、或いはまた主尊自身は偏袒右肩で転法輪印を結んでいても台座が蓮華座ではないようなものも、時に——稀に——は見られることもあるわけである。<sup>(37)</sup>したがつて、このように多少例外的と見得るような場合もあるので、上に見たような要素や条件なども全部具えていなければならないというわけでは必ずしもないが、いずれにせよ、両者若しくはそのいずれか一方と共通する部分Ⅱ要素が多ければ多い程それだけ、そのようなつまりその主尊が阿弥陀仏である可能性は高くなると見てよいであろうということである。<sup>(38)</sup>そうして、そのような筆者の見方によるならば、前節の二でも若干触れたモハメット・ナリー出土の石板像や同じくローリヤン・タンガイ出土の三尊像についてはもちろん、フーシェ以来これ迄漠然と?一般に「舎衛城の神変」を表したものと考えられてきた作例の大部分の場合においても、やはり同じように主尊は阿弥陀仏を表したものであらうということになるわけなのである。<sup>(39)</sup>

とともに、他方また単独像の場合についても、ガンダーラ彫刻の作品の中にはこうして阿弥陀仏に比定された群像中の主尊の大部分と同様の形姿をした、つまり偏袒右肩で転法輪印を結ぶ形で表されたものがやはり同じように少なからぬ数で見られるわけであるが、それらの中にも——もちろん、その全部がと迄は言い切れまいが——ある程度はこの仏の像が含まれていると見てもよいのではないかとすることである。<sup>(46)</sup>

## 六 要 結

新出の、とは言えその道の専門家にとっては既知でありむしろ周知の、二体のガンダーラ仏に対する考察乃至再検討は、われわれを思いがけない方向へ、また結論へと導くことになったようである。それは、これ迄必ずしもそれが一般に認められるという形では存在が確認されてきたとは言い難い阿弥陀仏の彫像が、実はガンダーラ彫刻の作品中にも少なからず存在していたのではないかということである。そして、その際の判定のための指標 (Merkmale) 乃至その基準となるものは、特に群像形式の場合には、その像の主尊が偏袒右肩で転法輪印を結ぶ姿で蓮華座の上に結跏趺坐するとともにその頭上には独特の形をした花?の姿が見られ、またその主尊の両側には脇侍像——その一方には、それが「観音」であることを示す特徴が表されていることが多い——が控えるか若しくは周りを菩薩形の群像が取巻くように表されるかしているということであって、そのような特徴乃至指標をできるだけ多く具えたもの程、阿弥陀仏であった可能性が高いのではないかということであった。また、そのことつまり主尊に関することは、単独像の場合にもある程度は当嵌まるのではないかということであった。そのような検討・考察の結果として、今述べた

ような結論に帰着した次第だというわけである。ところで、このようなことは恐らく多くの人の予期せぬ、予想乃至想像すらしなかったことであって、したがって、このように見、またこのようなことを主張しようとすることは如何にも大胆ということになるかもしれない。しかし、例えそれが一見どれ程思いがけなくまた大胆なもの（推測、若しくは仮説。人によっては、或いは単なる「臆説」ということになるのかもしれないが）のように見えようとも、もしそこに根本的な誤りや致命的な欠陥若しくは問題点・難点などがなかったとすれば、そのようなことも決してあり得ない、考えられないことではないと思われるわけであるし、したがってまたそのような仮説乃至その主張も、恰もそれが珍妙な「奇説」であるかの如く見做して簡単に斥けられて然るべきものでは決してあるまい、と筆者自身は考えるのである。

ともあれ、もし以上に述べたような筆者の見方が許される——正しい——としたならば、われわれは、単にガンダーラ彫刻における阿弥陀仏の彫像の有無といったことだけに留まらない、ある意味ではそんなことよりもっと遙かに重要で重大な問題について、従来の見方を根本的に見直し変更することを迫られることになるかもしれない。それは、具体的には、当のインドそのものにおける阿弥陀仏信仰の実態如何に関することで、つまり、前述のようにこれ迄文献的な徴証などから起源的には密接な関係を有していたと思われるながらも、考古学的な遺物や旅行者の報告等の実際にその実在を証明し乃至実態について物語るような資料の欠如などから種々に疑問視されてきたガンダーラ若しくはガンダーラを中心とする西北インド地方に実際にその仏に対する信仰の痕跡が初めて発見され、否むしろ、筆者に言わせるならば、該地こそが、少なくともガンダーラ彫刻が盛期を迎える二、四世紀頃<sup>⑦</sup>にかけては、そ

れの一大中心地だったのではないかということであって、逆に、そのことに比べるならば、初めて阿弥陀仏 (Amitābha) の名を刻んだ像が出現したということで一時学界に大きなセンセーションを惹起したマトウラーなどは、その意味ではむしろマイナーな地だった——少なくとも、この仏の信仰に関する限り——のではないかということである。ただ、この点に関しては、最早本稿の課題 (論題) の範囲を遥かに超えた問題でもあるので、それについて論ずるには次の機会を俟つかないわけであるが。

いずれにしても、以上のようなガンダーラ仏 (彫刻) の検討を通して、ガンダーラを中心とする西北インド地方で興起したと見られる阿弥陀仏に対する信仰は、やはりその同じガンダーラを中心とする西北インド地方で、少なくともガンダーラ彫刻が栄えた二、四世紀頃の間は、かなりの程度で人々の間に実際に浸透し行われていたことが窺われ、またそのことがある程度の確かさをもって確言できたのではないであろうか。固より筆者は仏教美術や図像学、乃至更に言えばガンダーラ美術などを専門にするものではないから、したがってその分野のことに關しては細かな誤りや見落しなども少なからずあったことと思われるが、それらのことがら等についてはいずれその道の専門家乃至その他諸氏・諸家の批正や示教を仰ぐこととして、ここでは如上のことを述べて、取敢えずはこの拙い論考を終えることにしたい。

(本稿は、『早島鏡正著作集』第三卷月報掲載の同題の拙稿に加筆・補正したものである。該稿では、その性格上従来の諸説や筆者の考え方等について詳しく触れて論ずることができず、また参考文献等についても未見のものが少なかつたために、改めて論述し直してみたというわけである。なお、本稿を草するに当っては、注

21に掲げた宮地氏の著書からは、特に参考文献に関することがら等でいろいろと示教を受けたことをお断りしておきたい。）

1 特にその発祥若しくは揺籃の地がガンダーラを含む西北インド地方であったことは、今日、学界の殆ど定説になっていると言つてよいであらう。

2 中村元「最古の阿弥陀仏像の意味するもの」『春秋』第一九六号、昭和五年、及びB.N.Mukherjee: *A Mathura Inscription of the Year 26 and of the Period of Huvishka, Journal of Ancient Indian History*, vol. XI, 1977-78に拠る。

3 中村、前掲論文参照（中村博士は、該論文の公表に先立って、前年一月に口頭でこの台座について発表・紹介されていたという。同論文七ページ参照）。なお、この台座や特にその銘文に関しては、静谷正雄『インド仏教碑銘目録』平楽寺書店、一九七九年、にも取入れられ、言及されている（No. 一八二三。同書二七ページ参照）。

4 これらの像の具体的なことがら等については、次の第三節で少しく触れることになろう。

5 本稿は、近時阿弥陀仏に関する、特にその原語の問題について再検討していた間に、偶ま気付いたことを述べんとするものである。必ずしも仏教美術、就中ガンダーラ彫刻について専門にする者でもない筆者がここでこのようなことを採上げて問題にしようとしたのは、実はここには単に仏教美術やガンダーラ彫刻だけでは留まらない、もっと大きな問題―意味内容が隠されているように思われたからなのであるが、いずれにしても、その方面のことには味い筆者のこととて、或いは気付かない範囲で思わぬ誤りなど犯している場合もあるかもしれない。その点、識者の示教を是非仰ぎたいと考える。

6 A. Foucher: *Le "Grand Miracle" du Buddha à Grâvasti, Journal Asiatique*, Jan.-Fev. 1909. (後22 "The

Great Miracle at Crāvastr' といふ英訳をば' do. *The Beginnings of Buddhist Art*, Paris-London 1917, pp. 147-84に収録。)

7 例えば、源豊宗「浄土変の形式」『仏教美術』第七冊、大正一五年や、J.C. Huntington: *A Gandhāran Image of Amītyus' Sukhāvati, Annali, Istituto Orientale di Napoli*, vol. 40, fas. 3, 1980 など参照。源氏は既に早く大正時代に主に法隆寺金堂西壁の阿弥陀仏の浄土変相図との比較から、また近時 Huntington 氏はこの像の図像学的な詳細な解釈に基いて、このように見る説を提起している。

8 例えば、樋口隆康「阿弥陀三尊仏の源流」『仏教美術』第七号、昭和十五年（後、同『シルクロード考古学』第一巻「インド・中央アジア」法蔵館、昭和六一年、に図版を除いて再録）など参照。樋口博士は、法隆寺などの三尊仏の特に様式的な起源をガンダーラ彫刻に求めようという立場から、このような説を提起された。

9 例えば、前者の Mohammed-Nuri 出土の石板像に関しては、先ず最初の源氏の説については、その後該論文については、関説されることはあってもこの石板像自体を阿弥陀仏を表すものとして認めたような著書や論文等は殆ど見られず、したがって大部分の学者によつては認められていないと言つてよいのである。またこの像に対する Huntington 氏の意見や図像学的な解釈に対しては、同じアメリカの Schopen 氏から厳しい批判が寄せられてゐる (G. Schopen: 'The Inscription on the Kusan Image of Amītibha and the Character of the Early Mahāyāna in India, *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, vol. 10, No. 2, 1987)。他方また後者の Lorian-Tangai 出土の三尊像の場合についても、先の源氏の場合と同様、樋口博士の論文が採上げられ言及されることはあつても、博士の説そのものがそのまま受容れられ認められているとは言えないようである（この点に関しては、例えば、宮地、後掲書、二四六ページ及び二七四ページ注（4）など参照）。

10 因みに、最近では、この二例の場合を含めて、Foucher が「舍衛城の神変」を表すと考えた一群の像は、『法華經』など何

かある大乘經典に基づいた釈尊の説相を表したものと考えられてきつゝある(例えば、J.M. Rosenfield, *The Dynastic Arts of the Kushans*, Berkeley & Los Angeles 1967, pp. 235-38 や、小谷仲男「ガンダーラ仏教美術の展開」『史林』第五〇巻第一号、一九六七年、高田修「仏像の誕生」岩波新書、一九八七年、一二九ページ、及び、宮地、後掲書、三三一一三七ページなど参照)。このうち、宮地氏は初め Foucher 説に従つてこれらを舍衛城の神変を表すものと見ておられたが「舍衛城の神変」『東海仏教』第一六輯、昭和四十六年、参照)、後になって考えを改められたようである)。

11 このような言い方は必ずしも正確若しくは適切なものではないかもしれないが、他に適当な方法も思い浮ばないので、こゝでは、便宜的にこれらの像をこのように言う方で呼ぶことにした。

12 *Oriental Art*, NS vol. XIX, Spr. 1973, p. 24; J.C. Harle: *A Hitherto Unknown Dated Sculpture from Gandhāra: A Preliminary Report*, *South Asian Archaeology 1973*, Leiden 1974. (ただし、前者は写真のみ。また、後者の刊行年は翌年になつてゐるが、こゝでは前者の写真と後者の研究そのものの発表日時の先後については問わなかつた)。

13 J. Brough: *Amitābha and Avalokiteśvara in an Inscribed Gandhāran Sculpture*, *Indologica Taurinensia*, vol. X, 1982.

14 J.L. Davidson, *Art of the Indian Subcontinent from Los Angeles Collections*, University of California 1968. (ただし筆者未見。直接には Mitterwallner 女史の指摘による。G.v. Mitterwallner: *The Brussels Buddha from Gandhara of the Year 5*, in *Investigating Indian Art*, ed. by M. Valdez & W. Lobo, Berlin 1987, p. 229 & p. 245, n. 136 参照)。

15 その意味では、したがって、この像は或いは「一九八二年」ではなくて「一九六八年」のロサンゼルス像」とでも呼ばるべきものかもしれないが、しかし、これが注目されるようになったのはやはり Brough 教授によるその銘文の解説―翻訳が

契機になっているであらうことからすれば、このように言いたくても、必ずしも不当とは言えないであらう。

- 16 Brough 教授の『The Avalokiteśvara of Buddhāmītra, a sacred gift, the Amṛtābha of Buddhāmītra...』の如く英語している。一方 Fussman 氏は『基本的には Brough 教授の読者のための改綴ながらも文章の解釈自体にはやや修正を加え、これを 'Gift of Buddhāmītra; (here is) Avalokiteśvara; sacred gift. (Gift of Buddhāmītra; (here is) Amṛtābha...』の如く記している (G. Fussman: Numismatic and Epigraphic Evidence for the Chronology of Early Gandhāran Art, in *Investigating Indian Art*, ed. by M. Yaldiz & W. Lobo, Berlin 1987, p. 73 参照)。なお一九七三年のフリッツマンの像にも碑銘は刻まれているが、これは直接この像の性格に関わるものでないといふことは触れなうとする。

- 17 実際、この点については Ingholt (I. Lyons & H. Ingholt, *Gandhāran Art in Pakistan*, New York 1957, pp. 121-23) を除く多くの学者がこの点を認めている (Cf. R. L. Brown: 'The Śrāvastī Miracles in the Art of India and Dvāravatī, *Archives of Asian Art*, vol. XXXVII, 1984') 例えは先攻の Fussman 氏や Mitterwallner 女史はもちろんで、近年のわが国の高田博士や宮地氏の著書の中にも、やや控えめな言い方ながら概ねそれを認めるような発言がなされている (Fussman, op. cit. p. 73; Mitterwallner, op. cit. p. 228; 高田『前掲書』二七—二九ページ、及び宮地『後掲書』二七—二七ページなど参照)。ただし、前記の Schopen 氏のみは必ずしもその限りではなく、このような見方には反対しているようである。つまり、氏は、この像を「Amṛtābha (即ち、阿弥陀仏)」とは全く無関係」(there is no reference in it to Amṛtābha at all) だとする (R. Salomon 氏の意見については、この点については Salomon 氏の意見そのものはまだ実際には公表されていないといふこと) それに賛同する旨のことを述べているからである (Schopen, op. cit. p. 130, n. 50 参照)。

ところで、このようなSchopen氏や若しくはSalomon氏の見方乃至意見に対しては、果してどのようなものであろうか。実は、該論文でSchopen氏が採上げて言及したSalomon氏の意見なるものが一体どのような根拠や理由に基いてのものなのか、Schopen氏自身は何も言っていないので本当のところは不明なわけであるが、もしそれがこの碑銘の‘Amridaha’なる一種異様な仏名——因みに、Brough教授は、この仏名を‘Amritābha’の如くに還梵していた——にあったとするならば、例えば阿弥陀仏の原語としてAmritābha（若しくはAmityasus）のみを考えようとするれば、そのような主張もある意味ではむしろ当然と言えるかもしれない。しかし、翻って考えてみるに、この仏が「観音」を伴っているというこの図像学的な意味から言っても、この‘Amridaha’なる仏名がそのAmritābhaと一見やれ程乖離しているように見えやうとも、これを阿弥陀仏とは「全く無関係」だなどと安易に考えて両者の関係を無下に否定したりするようなことはできることではないし、また許されて然るべきことでもないのではないであらうか。ということで、筆者としてはこのようなSchopen氏（若しくはSalomon氏）のような見方や意見に対しては、どうしても反対したいと思うのである。

- 18 この「ターバン冠飾」なる名前は、宮地氏の用語をそのまま借用したものである。宮地、後掲書、二四八ページ以下参照。
- 19 因みに、ガンダーラ彫刻の中で、このように宝冠若しくはターバン冠飾に化仏を戴きしたがって観音菩薩を表していると思われる像については、これ迄のところ、このブリュッセルの像を除き他に三体程知られているが（A.K.Coomaraswamy, *History of Indian and Indonesian Art*, Leipzig 1927, pl.XXVII, fig.95; Lyons & Ingholt, *op. cit.* pl.326, 及び、高田修「ガンダーラ美術における大乗的徴証——弥勒像と観音像——」『仏教芸術』第二二五号、昭和五二年、図一一参照。ただし、直接には高田博士の指摘に拠る。同論文、二二—二二ページ参照）、いずれも単独像のようであって、このように三尊（または五尊）形式での、若しくは複数形式でのものは他には見られないようである。

20 ここで宮地氏の説について採上げようとしたのは、偶ま同氏の説に著書が筆者の目に触れ、或いはまたそれが最も纏っていて詳しいと思われたからであって、決して個人的に同氏を云々しようとのことなどではないので、そのことをお断りしておき

たい。因みに、前述の Mitterwallner 女史も宮地氏同様もう一方の菩薩を「弥勒」、また中央の主尊を「釈迦」と見る見方を示しているが (Mitterwallner, op. cit. pp. 215-19 参照)、筆者にとっては別にその女史の説でもよかったわけであるから (Fussman 氏は 'Mitterwallner 女史とは異なつて、これらを阿弥陀仏と観音・勢至の両菩薩を表すものと見ている。Fussman, op. cit. pp. 73-74 参照)。

21 宮地昭「涅槃と弥勒の図像学——インドから中央アジアへ——」吉川弘文館、一九九二年、の特に第Ⅱ部第二章「ガンダーラの三尊形式の両脇侍菩薩の図像」参照。

22 因みに、宮地氏は上述のことをガンダーラ彫刻の中でも特に非常に特徴的な一群の三尊 (若しくは五尊) 形式の像について考察し言われているわけであるが、同氏によると、そのような作例はこの一九七三年のブリュッセルの像を除いても一八にも達するという (前掲書、二六五ページ参照)。

23 宮地、前掲書、三六五—六八ページ参照。

24 そもそも、弥勒と観音は、經典上は一応両者ともに一生補処の大菩薩とされているけれども、両者の性格や担われられ若しくは期待されている役割乃至特に大小乗の經典における扱われ方などを見ると、両者の間にはかなり顕著な相違があつて、ある意味では到底同列に並置されセットとされるようには思われない面も存するわけである。例えば、弥勒は阿含經典にも説かれている菩薩であるが観音はそうではないし、また弥勒はどちらかと言うと此土の菩薩であるのに対して観音は他方世界の菩薩と見られ、同様に弥勒はどちらかと言えば現世においてよりもむしろ来世で成仏してからの救済が期待されているのに対して、観音の方は成仏してというよりは菩薩のままでの現世利益 (救難・救苦) の方に比重が置かれているらしく思われること——もちろん、観音の成仏や成仏後の救済などについて説く經典も全くないわけではないが——等々。このようなことを考慮に入れば、特に大乘においてはさまざまな菩薩がある意味では自由にとつてよい程説かれた現れているわけであるから、必ずしも無理にこれら両者を結びつけなくてもっと自由に観音なら観音、弥勒なら弥勒に相応しい組合せセットを作り得た筈

であるし、また実際にそうしろと考えてもよいのではないであろうか。

25 例えば、支謙訳と伝えられる『大阿弥陀経』には「諸菩薩中有最尊両菩薩、常在仏左右坐侍正論。仏常与是両菩薩共对坐、議八方上下去来現在之事……其一菩薩名蓋楼巨、其一菩薩名摩訶那鉢」（大正一二、三〇八中）とあって、既に阿弥陀仏と観音・勢至の二菩薩を一セットとして捉える考えのあることが知られるが、この経が遅くとも三世紀前半には訳出されていたことを考慮すれば、それに先立つ二世紀半ば乃至後半頃迄には既に該地ではそのような考え方が成立したある程度広く流布していたと見てよいであろう（『大阿弥陀経』の訳者を筆者は支謙ではないかと考えているが、もしそうとすればこの経の訳出は二世紀後半、また経目録通り支謙の訳と見れば三世紀前半ということになる。この経の成立自体はそれよりも数十年は前だったと見てよいであろう）。

26 阿弥陀仏や特にその三尊像の日本における作例については改めて言う迄もないであろうが、中国にもそのような例の存在したことは、いくつかの徴証によって知ることができる。例えば、一九五四年に発掘された曲陽・修徳寺址出土の「天統四年（五五八）」銘の石像には「弥陀玉像観音大勢二菩薩」とあり、また同「天保六年（五五五）」銘の像にも「無量寿像一区（軀）并二菩薩」とあって（楊伯達著・松原三郎訳『埋もれた中国石仏の研究——河北省曲陽出土の白玉像と編年銘文——』東京美術、一九八五年、図版三三、三一及び「銘文釈文」、一七〇ページ参照）、ともに「阿弥陀三尊」を表したものであることを示しているし、或いはまた、やや時代は下るが、これとほぼ同様のことは唐代の龍門の「像記」によっても知り確認することができるからである（例えば、総章二年（六六九）造の「唐高宗夫人造阿弥陀観音大至二菩薩像記」や万歳通天一年（六九六）造の「周李客師造阿弥陀像二菩薩記」、水野清一・長広敏雄『龍門石窟の研究』座右宝刊行会、昭和一六年、二四七―四八及び二五〇ページ、など参照）。一方また、これらとは別に、五世紀後半乃至末頃の雲岡でも、碑銘こそないものの、その像容から「阿弥陀三尊」を表したと見られる像の存することが確認されている（例えば、水野清一「雲岡の阿弥陀像について」『支那仏教史学』第五卷第二号、昭和一六年、後、同『中国の仏教美術』平凡社、昭和四九年に再録、参照）。

27 この点に関しては、いずれ機会があれば別に詳しく論じてみたい。

28 宮地、前掲書、一三九—四〇ページ、及び第Ⅱ部第二章、二四五—八〇ページ参照。

29 因みに、『観無量寿経』では観音・勢至両菩薩とも「天冠」を戴くとされるが、観音の場合には「頂上毘楞伽摩尼妙宝以為天冠、其天冠中有一立化仏」（大正二一、三四三下）とあってその天冠の中に「立化仏」があると考えられているのに対し、勢至の場合には「此菩薩天冠有五百宝蓮華、一一宝華有五百宝台、一一台中十方諸仏淨妙国土広長之相皆於中現。頂上肉髻如鉢頭摩花、於肉髻上有一宝瓶、盛諸光明普現仏事」（同、三四四上）とあって「宝瓶」は天冠の中にはなくて肉髻の上に直接安置されているように記され、「天冠」についてもそうであるが、特に「（立）化仏」と「宝瓶」に対する両者の扱いにかなり大きな相違のあることが知られる。ところで、ここで一見やや奇異に思われるのは、この後者の勢至の場合も観音同様「天冠」を戴くとされながらも、その勢至の「宝瓶」がこの場合のみ観音とは異なっておりその「天冠」ではなく「肉髻上」にあるとされているということであろう。と言うのも、もしこの勢至の場合にも「天冠」が本来のものであったとすれば、この菩薩を特徴付ける言わば象徴たるべき「宝瓶」もその「天冠」の上にあつて然るべき筈であるし、また逆にその「宝瓶」が「肉髻上」などにあつたとしても「天冠」に隠されてしまつて外部からは見えない——若しくは、少なくともその存在はそれ程はつきりとは知られない——筈であるから、何もこのように殊更に「肉髻上の宝瓶」ということに拘泥し強調する必要もないように思われるからである。ということは、逆に言えば、この場合の「天冠」は決して勢至本来のものではなくて後から——恐らくは観音のそれに倣つて——付加えられたものかもしれない、むしろその可能性の方が高いということを物語っているのかもしれない。とすれば、つまりこの勢至の場合には「天冠」は非本来的な言わば後から取つて付けた如きものとすれば、その図像も、少なくともその頭部に関する限りは肉髻型の束髪タイプの「行者のイメージ」で——すなわち、「宝瓶」を別にすれば、「弥勒」と同じ形に——表されていたと見てよいことになるのではないであらうか。

30 因みに、宮地氏も、一九八二年のロサンゼルス像については「この三尊像の右脇侍は、おそらく通例の束髪・持水瓶タイ

ブの菩薩像ではなかったかと推測」されるわけであるが（前掲書、二七三ページ）、しかし、その一方で氏は「阿弥陀信者たちが弥勒と観音を両脇侍とする一般的な仏三尊像の図像を借用し、それを阿弥陀三尊像としたのではあるまいか」（同）とはされつつも、この一九七三年のブリュッセルの像の場合については、これをそのようにつまり右脇侍は「勢至」で主尊は「阿弥陀」と、それぞれ見ることは拒否されたわけである。

31 この点については、例えば、宮地、前掲書、第Ⅱ部第一章、二一三―二四四ページなど参照。特にガンダーラ彫刻の場合には、五尊像の中の菩薩と神の両者ともに水瓶を持っているような作例も見られる（例えば、栗田功『ガンダーラ美術Ⅰ』二玄社、一九八八年、二〇〇ページの図版四〇三、四〇四など参照）。

32 例えば、前注29でも触れたように、『観無量寿経』には「於肉髻上有一宝瓶、盛諸光明普現仏事」とあって、勢至菩薩が水瓶と密接に結び付けられていたことを示している（この『観無量寿経』は浄土経典としてはそれ程古い成立ではなく、したがって、ガンダーラ彫刻における筆者がそのように見る勢至像との先後関係についても、このような経典の規定があってそれに則る形で像が作られたというよりは、むしろ実際の作例が先にあってそれに従う形でこのような経典の記述もなされたと見た方がよいかもしれない。いずれにしても、これが「勢至」と水瓶の間に密接な関係のあったことを伝え証するものであることに、変りはないと言ってよからう）。

33 むしろ、本来ならば別様に表象されて然るべきでありまたそれが可能であった筈の勢至の像が、敢えて？そうはされず「弥勒」と同じように描かれ表されたというこの方をこそ問題とすべきではないであろうか。そして、先に筆者は勢至と弥勒の両菩薩は起源的に見て何らかの関係があるのではないかと想定している旨のことを述べたが、筆者がそのような考えに想到したのも、実は一つにはこのような、つまりこれら両者はこの一見致命的？とも思われない水瓶によっても結びつけられているということがあったからなのである。

34 因みに、Mitterwallner 女史は宮地氏と同じく図像学的な見地からこの右脇侍像を「弥勒」を表したものと見るが（op.

cit. p.215) Fussman 氏は、筆者と同じ理由からこれを「勢至」と見る立場を示している (op. cit. pp.73-74 参照)。

35 特に図3からも知られるように、この極めて特徴的な形をしたものが果して花そのものを表しているのかどうか必ずしも分明ではないが、もし花であったとすると、一体何の花と見るべきなのであろうか。試みに、これに似た形の花を探すために『原色世界植物大図鑑』北隆館、昭和五五年、を繰りてみたところでは、やまもがし科に属する *Banksia serrata* という植物(樹木)の存することが知られるが、その花は穂状の花芯が図の花? とは逆に上を向いておりしかもそれ自体がオーストラリア大陸南部のタスマニア島などに自生する樹木だということであってみれば——インドそのものにもあるのかどうかは不明——、ここではそれとは直接関係ないようにも思われる。そこで少しく考えてみるに、筆者の見たところ、これは或いはアショーカ樹 (*Jonesia asoka* = *Saraca indica*) の花をやや変形したものではないかと想像されなくもないが、しかし、この見方もそれ程根拠や確信がなかったので、この点識者の示教が戴ければ幸いである。

36 因みに、Huntington 氏も前記論文で Mohammed-Nari 出土の石板像について考察した中で、その末尾に言わば結論といった形で、「更なる研究を俟つことではあるが、蓮華座に坐し転法輪印を結ぶガンダーラ仏の多くについては、これを阿弥陀仏と同意して然るべきであらう」という旨 (it may be that many of the Gandharan Buddhas seated on lotuses and displaying *dharma-cakramudra* should be identified as Amītibha but only further research will determine this) のことを述べている (op. cit. p.672 参照)。

37 例えば、Lyons & Ingold, op. cit. pl.252,256 の作例など。

38 例えば、栗田、前掲書、二〇一—〇三ページ図版四〇七、四一〇、四一一や、宮地、前掲書、二五九ページ図二二八の作例など。

39 その他、極く稀な例として、主尊が偏袒右肩で蓮華座の上に坐しながらも両手の印相が必ずしも転法輪印でないものもある。栗田功『ガンダーラ美術Ⅱ』二玄社、一九九〇年、三五ページ図版七六はそのような一例であるが、しかしこの作品の場合に

も、主尊の頭上には例の極めて特徴的な形をした花？が見られ、また主尊を取巻く二〇体の群像も全て菩薩形に表されていることなどから言っても、前記の諸条件に当嵌めて、この主尊を阿弥陀仏と見ることに特に支障はないと言ってよいであろう。

40 やや例外的とも思われるような作例は、実は主尊だけではなくて脇侍像の場合にも見られる。例えば、Lorijan-*Langar* 出土の三尊像（宮地、前掲書、口絵三八参照。これは前節二で触れたのとは別のもの）の場合には、主尊及び左脇侍像——これは「観音」としての特色を見えている——に関しては特に問題はないものの、ただ右脇侍像についてのみは、左手に梵夾を持ちまた右手の第二指は額に当てて半跏思惟の姿勢を採るという、他にあまり例を見ない形で表されているからである。この点に関しては、宮地氏も「後世の図像学からすれば、梵夾を持つことからみて文殊菩薩とされうるが、果してガンダーラにもそれが適用できるかどうか確たる根拠はない。しかし、逆にそれを否定し、別の尊に同定することはより困難といえよう」（前掲書、二六三ページ）と述べられるだけで、特にこの像の尊格に対する積極的な見解は示されていない。実際、氏も言われるように、後世の図像学を基にすれば、この像は「文殊」と見るしかないものかもしれない。しかしその一方で、「文殊」と「観音」の組合せについては、「弥勒」と「観音」の場合同様恐らく他に殆ど類例がないと思われることなどからすれば、この場合も必ずしも「後世の図像学」には拘泥せずに、主尊や特に「観音」としての特色を有する左脇侍像との関係などから言って、やはり「勢至」と見て然るべきではないかと考えられるわけであるが、如何であろうか。

41 その点、ただ主尊が偏袒右肩で転法輪印を結んで——更によえば、結跏趺坐して——いるというだけでは阿弥陀仏と見ることはできず、またそのことだけから単純にそのように断定しようとするのは逆に大いに危険性があるということにもなる。と言うのも、中には主尊がそのような形姿で表されていても、別様に解釈されているような像の例も全くないわけではないからである。例えば、そのような代表例として、「優填 (Udayana) 王の造像」を表したとされる *Sabri-Bahlot* 出土の像 (Lyons & Inghold, *op. cit.* p.125; 栗田『ガンダーラ美術Ⅰ』二〇八ページ図版四二五など参照)などを挙げることができであろう。すなわち、この像の場合にも主尊はそのように偏袒右肩で転法輪印を結んだ形で表されているわけであるが、

もしこれの比定に誤りないとすれば、当然阿弥陀仏とは見得ないことになるからである。ただしこの像の場合には、他の部分に関しては上記諸像と共通する点は殆ど全くと言ってよい程見られないわけであるから——例えば、台座の形も異なっていれば、特有の形をした花？の姿も見えず、またその反対に、前記諸像には見られなかった僧形の人物像も二体程表されている、等々——、上述のような筆者の見方の反証となり得るものでは決してないということが言えるというわけである（これと主尊が似た形の作例が Lyons & Inghold, *op. cit.* pl. 101; 栗田、同上書、一六八ページ図版五五九にも見られるが、同様の他の場合も含めて、ここでは省略する）。

42 前注10でも少しく触れたように、この像は、現在では多くの学者によって例えば『法華經』など何かある大乘經典に基いた釈尊の説相を表したものと考えられているわけであるが、しかし、そのような説法の会座には多くの場合単に菩薩だけではなくて比丘・比丘尼はもちろん天・竜など人間以外のもの迄集まっていたとされるのに対し、この像の場合には一部——主尊の蓮華座の両脇に立つ男女と池中の四体、それに主尊の頭上の花鬘を捧げる二体と同じく傘蓋を捧げる四体の計一二体——を除き他は全て菩薩形で表されているということなどを考慮すると、このような見方には若干無理があるようにも思われる。しかもその一方で、例えば〈無量壽經〉などにおいても、阿弥陀仏の国土に菩薩以外の声聞などの存在も必ずしも否定されていないが、しかしその中心をなすのはやはり菩薩であろうことを考えるならば、この像はやはり阿弥陀仏——及び、その浄土——を表したものと見た方が自然なのではないであろうか。因みに、Huntington 氏がこの像の比定に際して用いたのは専ら *Sacred Books of the East* 所収の諸テキストのみであったが、氏がもしそうではなくてより古い『二十四願經』就中『大阿弥陀經』などに拠っていたとしたら、より正鵠に近づき得たものではなかったかとも思われるのであるが。例えば、『大阿弥陀經』には、説法に際してということではないが、この仏＝阿弥陀仏が水中に生えた蓮華の上に坐することが説かれているわけであるし（大正一二、三〇五下参照）、或いはまた、この石板の中央の段のアーチ状の樓閣の中のいずれも交脚で趺法輪印を結んだ形の二体の菩薩像についても、筆者はこれらは「観音」と「勢至」を表しているのではないかと考えているのであるが、その

ことは、前注25でも少しく触れたこれら両菩薩に対するこの経の記事ともよく契合するように思われるというわけである。

43 ただし、この点に関しては、前注9も併せて参照。

44 所謂「双の神変」を表したとされるものを別にすれば、その殆ど唯一の例外とも言うべきものは、宮地氏が四種に分類した(前掲書、二四六―四七ページ参照)中で言えば第二のグループに属するとされるものであろう。すなわち、それらは、同氏の書でも「禪定仏と多数の化仏」を表すものとされているように、主尊——その殆どは通肩——が禪定印を結んで蓮華座の上に坐し、その周囲を多数(八体程)の化仏が取巻くように描かれ表されたものであるが、このような場面乃至様子は実は前述の Mohammed-Nari 出土の石板像の中に既に含まれている(図1参照。それらは図の上端左右隅の像に相当する)ものであるし、しかもその一方では、それが一体どのような情景・場面を表したのか必ずしも分明ではないため、当面除外しておいた方がよいであろうと考える、というわけである。

45 宮地氏は、ガンダーラ彫刻における三尊形式の像の作例を四一程集めてリストアップされているが(前掲書、二七八―七九ページ及び二七七ページの「付記」参照)、そのうち、筆者が追跡・確認し得た三〇余例について言えば、中には主尊が倚座像や立像の場合など必ずしも前記条件に合致しないものもないわけではないが、そのような場合も含めて、いずれも阿弥陀三尊を——すなわち、主尊については阿弥陀仏を——表したものと認め難いような作例は見当たらないと言ってよいようである。

46 前注38の場合のような例があるので、一概に若しくは簡単には言えないわけであるが、もしこの像が蓮華座の上に坐しているような場合(例えば、栗田『ガンダーラ美術Ⅱ』、八九ページ図版二二四など参照)には、阿弥陀仏を表していると見てまず間違いないのではないであろうか。また、台座そのものは蓮華座ではないけれども、その正面部分に「観音」と見られる、ターバン冠飾を戴き左手に蓮華らしきものを持った交脚の菩薩と六人の礼拝者?を表したような作品もあるが(同上書、九〇ページ図版二二九参照)、これなども、もしその菩薩を「観音」と見得るとすれば、やはり同じように阿弥陀仏を表すと見てよいように思われようが、どうであろうか。なお、前者に準ずるものとして、蓮弁こそ表されていないけれども、一部残る円

形の形から本は蓮華座だったと推測されるようなものがあり(同上書、八九ページ図版二二六参照。この像は光背の頂きに塔形のを有するやや特異な像でもある)、また後者の場合にも、それに類似してはいるが目下のところ必ずしも阿弥陀仏と見得るとするには判断を留保せざるを得ないものとして、台座に描かれた菩薩像が、ターバン冠飾は戴くが禪定印を結んでいて蓮華は持たないために、必ずしも「観音」と確認できないようなものがある(例えば、Lyons & Ingholt, *op. cit.* pl.248, 249, 251や、栗田、同上書、八九一九〇ページ図版二三三、二二七など参照)。

47 ガンダーラ彫刻の年代については、カニシカ王の場合のそれと併せて、いろいろな説があるようであるが、ここでは、わが国で一般的に受容れられ認められていると思われる説に従っておいた。ところで、法顕がこの地を訪れたのは五世紀初めのことであったが、その法顕の記録(旅行記『法顕伝』)にこの仏に関する記述が見られないことからすると、その信仰も或いは四世紀の後半頃には既に下火になり、消滅しかけていたのかもしれない(尤も、この問題に関しては、法顕の入竺の動機や目的が専ら『律蔵』の入手にあったということなどを含めて、種々の観点から更に詳細な検討や考察がなされる必要があるであろう)。

48 因みにSchopen氏は、前記論文の中で、マトゥラー彫刻に付された碑銘の検討を通して、クシャーナ朝時代のマトゥラーでは仏教はむしろ弱小宗教であって、その中でも阿弥陀仏(Amitabha)への信仰は更によりマイナーなものだったと見るべき旨のことを述べている(*op. cit.* p.118参照)。実際、単に碑銘のみならず実際の仏像等の作例においても、小論で採上げて検討し確認したような、それが阿弥陀仏を表すと認め得るような形姿をした像は、マトゥラー仏の場合には殆ど見られないようであるから、少なくともこの時代におけるマトゥラー地方での阿弥陀仏信仰に関しては、そのように見ることも或いは可能かもしれない。とすれば、少なくともこの二、四世紀頃のインドにおいては、この仏に対する信仰はやはりガンダーラ若しくはガンダーラを中心とした西北インド地方がその中心であったと見てよいことになる。なお、宮地氏はグプタ朝時代のサルナートなどにおける、一方の脇侍像が「観音」と認め得るような三尊像についてもいくつか採上げて言及されていた

わけであるが（前節四及び前注22参照）、もしそれらも前節四で述べたと同じ理由によって同じように「弥勒」及び「釈迦」との三尊ではなくて阿弥陀三尊を表すと見るべきもの、乃至はそのように見得るとすれば、グプタ朝期のサルナート若しくはその近傍においても、この仏に対する信仰は実際に存在したということになろう。

49 例えば、小論で筆者が阿弥陀仏のそれと判定した像の中には、主尊の台座である蓮華座の下部またはすぐ脇に一際、乃至、やや——小さく描かれた人物像が表されている場合がある。その多くは跪いて合掌し、主尊を見上げるような姿勢を採っているが、中には立ったままの姿勢のものもいくつか見られる。ところで、通常の？菩薩像などとはやや異なった姿・形で表されているこれらの像——例えば、図1の場合で言えば、主尊の台座の両脇に立つ一組の男女の像など——は、筆者は、その彫像（作品）の奉献者自身を表しているのではないかと考えるのであるが、もしこのように見るのが正しかったとすれば、そのような奉献者？の中には俗形だけではなく僧形のものも時には見られるから（例えば、図4など参照）、この仏——阿弥陀仏に対する信仰も単に在俗者の間だけではなくて出家者に迄亘って広く——かつ深く？——浸透していた、ということも多分に考えられることになるであろう。

〔付記〕 本稿脱稿後気付いたことがあるので、その点について一、二触れておきたい。

まず、その後樋口博士は、間接的な言い方ながら一九七三年のブリュッセルの像と一九八二年のロサンゼルス像について言及し、先の場合を含むガンダーラ彫刻における三尊仏が阿弥陀仏を表すものではないかとの見方——意見を示されている（『ガンダーラの美神と仏たち——その源流と本質——』NHKブックス「ヘカラー版」、昭和六一年、一一二ページ参照。ただし、博士の言葉は短く、また漠然としているので、どの範囲までを阿弥陀仏の像と認めようとされているのか、詳しいことは不明であるが）。また、林和彦氏もこれら両像について触れ、後者の場合もそうであるが、特に前者の一九七三年の像について、それが「阿弥陀三尊像である可能性が高い」と述べられている（『大阿弥陀経』にあらわれた光明の性格と北西インド』『仏教美術』

第一六五号、昭和六一年、九一一九二ページ参照。同氏はまた、それに続けて「同じ像容をもつガンダーラ三尊形式像の中にも阿弥陀三尊像が存在する可能性がある」とも言われるが、単なる指摘乃至示唆に留まり、それ以上の言及はされていない。

一方、これ(ら)に先立つ形で、田辺勝美氏はその一九七三年の像について、この像の台座に刻まれた「五(若しくは四)年」という紀年銘をカニシカ紀元のこととすると様式と年代の間に大きなズレが生ずるとして、これが「優秀な贋作である蓋然性が大い」旨のことを指摘・主張されている(『クシヤン美術研究に関して』『月刊シルクロード』一九八〇年八／九月号、二六ページ参照)。この、特に田辺氏が指摘された該像の真贋云々の件については、筆者の立論にとっても極めて大きな意味を有することがらになるわけであるが、今ここでその問題について触れ論じているではないので、いずれ後日の課題ということにしておきたい(因みに、煩を惧れて本論の中では触れなかったけれども、様式との関係で問題となるこの像の紀年銘に関して言えば、Mitterwalner 女史はこれをカニシカ紀元ではなくて五世紀半ばごろ〔448+X〕に始まるという白フン＝エフタルの Khingala 紀元によるもの〔=453+X〕と見る説を提起している。Mitterwalner, op.cit. p.222 参照)。

なお、中国における阿弥陀三尊の像については、三尊の各名を明示したものとしては炳靈寺石窟の第一六九窟に「建弘元年歲在玄枵」の紀年銘を有するものがあり、一応これが最早期のものとしてとされているようである(『中国石窟 炳靈寺石窟』平凡社、一九八六年、二〇〇ページ。西秦の「建弘元年」は四二〇年に当るが、「玄枵」は建弘五年＝四二四を表すと見られている。同、一九七ページ参照)。

以上は、特に田辺氏説の場合を除いては、筆者の所説や立論に直接関わり若しくは影響を与えたりするものではないが、取敢えず付記しておく。また、一九七三年と一九八二年の両像については、他にも多々閑説した專著や論文等もあるかとも思われるが、それらについても、後日を期すことにしたい。